

## 《書評》

小林富久子監修、石原剛、稲木妙子、原恵理子、麻生亨志、中垣恒太郎編

『憑依する過去 アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』(金星堂、2013年)

*Possessed by the past: Trauma, memory, and regeneration in Asian-American literature* (Supervising Editor Kobayashi Fukuko, edited by Ishihara Tsuyoshi, Inagi Taeko, Hara Eriko, Asō Takashi, and Nakagaki Kōtarō. Kinseidō, 2014)

被爆を経験したものにとって、2001年の「9.11」で世界貿易センタービルの崩壊を「目撃した」ものにとって、さらに2011年の東日本大震災を経験したものにとって、直接被害を被った人々のみならずそうではない人々にとってもこのトラウマ的経験、その記憶をどのように捉え、語り、どのように後世に伝えていくかは大きな課題である。このことと大いに関係しているであろう、アメリカ文学側からの問い。「アジア系アメリカ文学はトラウマという角度からいかに分析できるか」、本書が検証しようとしているのはまさにこの点にある。このアンソロジーはアメリカ文学者の小林富久子氏が早稲田大学を退職する記念として編まれ、それぞれ「戦争、人種、ジェンダー・セクシュアリティ、移動・越境」という四部構成である。四つの主要テーマごとに21編の論文が収められ、非常に読み応えのある一冊に仕上がっている。各テーマが互いに重複することもあるのだが、このことはむしろ各論考の扱う問題の根深さを物語る証左となっている。

序文で小林氏本人も指摘しているように、「アジア系アメリカ文学」がジャンルとして認識されるのは1970年代からであり、いまだに新しい領域と言える。しかし、今日では、たとえば評者が2000年代にアメリカ留学時にも、アジア系アメリカ文学の研究は非常に盛んであるという印象を受けたし、何よりマキシーン・キ

ングストンやエイミ・タン、デーヴィッド・ヘンリー・ホアンなど既に米文学のキャンノンの地位を獲得しているものも存在している。

本書の内容を紐解くと、日本におけるアジア系アメリカ文学研究の水準の高さに驚かされるであろう。本書が示しているのは、昨今の文学研究の切り口として重要な視座を提供しているトラウマが、殊に多様なアジア系アメリカ文学が扱う諸問題、とくに心理的な経験や歴史的問題を分析する際にいかに有効かつ必要不可欠なものであるかという点である。

トラウマと文学に関する先行研究では、たとえばキャシー・カールスの『トラウマ・歴史・物語—持ち主なき出来事』があり、カールスについては本書でも頻りに言及され本書の一つの基調をなしている。カールスによれば、トラウマはそれを抱え込んでいる本人によっては決して言語化できないものであり、「外に向けて叫び声を発する場であり、それ以外の方法では伝えることのできない現象や真実をわれわれに語ろうとする試みそのもの」(7)である。現実起こった出来事そのものからくる傷痕だけでなく、それを言語化できないことからくる反復的で副次的な傷痕を指す。トラウマは「ある危機的な出来事を、それと知らぬ間に生き延びてしまうこと」によって引き起こされる。「それと知らぬ間に」、つまり「理解しえぬままに」生き残ってしまったからこそ、その出来事は理解されるまでいくども回帰するのだという。

カールスの具体的なテキストや映画の読みに沿ってトラウマの議論を進めていくという手法は本書にも生かされている。アメリカにたどり着く前に祖国での戦争や紛争から逃れ生き延び、目的地アメリカにおいてさえ文化的社会的圧力の下で差別の対象とされてきたアジア系アメリカンにとって、「知らぬ間に生き延びてしまうこと」から生じるトラウマ的出来事が文学作品のテーマを占めるのはよく理解できることである。本書では多様なアジア各国からの移民(系)の人々の経験、歴史がトラウマの視点から分析されていくが、同時にそれはトラウマという事象がいかに複雑なメカニズムで機能し、多様な事象において見出されうるかを逆照射してもいる。

第一部でまず問われるのは「戦争」とトラウマ。小林論文は第二次大戦中、日本兵の性のはげ口とされていた朝鮮半島出身の「慰安婦」をテーマとして扱うコリア系作家ノラ・オッジャ・ケラーとチャンネ・リーを取り上げる。この章の中で小林論文は、「慰安婦」に関わる出来事や事実を確認するのみならず、トラウマ的記憶をいかに伝えるかという点について考察する示唆に富む論文となっている。小林氏がアジア系も含めたさまざまなアメリカ女性作家の作品に表出する複層的な声のありかたを研究対象とした『ジェンダーとエスニシティから読むアメリカ女性作家一周縁から境界へ』と合わせて読んだ著者にとっては、さらに刺激的な論考であった。

第二部では「人種」の問題に焦点があてられている。その中で石原論文はオト・ワタンナというアジア系初の小説家として知られている中国・英国系の混血女性作家を取り上げ、小説『ハイアシンスの心』の詳細な分析を通して、一見無邪気なジャポニズム小説を偽装する本小説には、白人中心主義と男性優位主義というトラウマ、その二重のハードルを越える物語が内在しているさまを綿密に論じている。「語りえぬということを語ること」にこそ過去の現実との接点を見出すトラウマ理論を踏まえた読みごたえのある一章である。

第三部は「ジェンダー・セクシュアリティ」、第四部では「移動・越境」をテーマとしている。その中で、麻生論文はヴェトナム系作家のGB・トランの『ヴェトナムアメリカ』をとりあげ、本作品がヴェトナム系アメリカ文化における歴史の再構築と、それから生まれる新たな共同体「トランスコミュニティ」の可能性を探るものであると指摘する。『ヴェトナムアメリカ』で描写されるヴェトナム系家族のモザイクとしての歴史は「大きな歴史的視座から見れば個々の記憶やトラウマ的体験の断片にすぎないが、その断片性ゆえにむしろ多くの人々に共有されうる可能性を有する」という主張は説得性を持つ。

本書はアジア系アメリカ研究に関心がある研究者や学生のみならず、一般読者も大いに楽しむことができる魅力と刺激に富んだ一冊である。アジア系アメリカ文学研究会（AALA）のシンポジウムでの「アジア系アメリカ文学とトラウマ」という企画が生んだ大きな成果を本書に見ることができるだろう。